

“自ら求める”やうな動機づけを

然し、それよりも問題なのは、“学習”はその効果が大きく著しいのに比較して、“勉強”はその効果が乏しいことです。同じ時間、同じ努力をしても、その効果が著しく違ふのです。だから、教育は、「課してやらせる」ことはすべきでないのです。「学習者が自ら求めて学習するやうに動機づけをしてやる」ことが必要です。

それは「課してやらせる」ことよりも難しい事であって、それこそ大変な仕事だと思はれるかも知れません。然し、よく考へて戴ければ解りますが「課してやらせる」ことよりも頭を使ふ仕事だからこそ、教育に任ずる者にとって実にやり甲斐のある楽しい仕事になるのです。とりわけ、こちらの計画通りに学習者が動いてくれた場合には、そのために払った苦勞が大きければ大きいほど、そこから得られる喜びは大きいものになるはずで

す。それに幸か不幸か、子供は好奇心の塊みたいなものですから、こちらから特別の工夫をしなくても、子供の方からどんどんと学習の動機を提供してくれるものです。一寸した事にも疑問を抱き、うるさいほど質問して来るものです。だから、親や教師が一寸工夫をするだけで、子供は読書や技芸の練習に熱中して止まる所を知らないやうになるのです。

森敦氏が書いた幼児期の思ひ出でしたか、こんな話がありました。仲間が皆新しい制服を着てモダンな幼稚園に通ってゐるのに、自分だけ

白髪のお老人がただ一人で指導してゐる古ぼけた漢文の学習塾に通はされ、何とも面白くない顔をして帰宅すると、母親が「お母さんはねえ、論語って全く読めないの。お母さんに読んで教へてくれる？」と言ったのださうです。

この母親の一言で、それまで沈んでゐた気持ちがいっぺんに吹き飛んでしまひ、「何だ。お母さんは論語が読めないの。じゃあ、僕が教へて上げる」といふわけで、得意になって「子曰く、学びて時にこれを習ふ。また悦ばしからずや。……」と、たった今習って来たばかりの論語を朗々と読み、それから毎日喜んでこの塾に通ふやうになった、といふことです。

子供ってこんなものでせう。親の一寸した一言が、沈んでゐる子供の心をいっぺんに晴らし、それまで「つまらないこと」「いやなもの」と思つてゐた事が、「楽しくてたまらないこと」に一変してしまふのです。だから、親としてこれほど楽しく、かつやり甲斐を覚える仕事は他に少ないのではないでせうか。

先に紹介したルース・ローレンス嬢の父親が勤めを罷めて子供の教育に専念したといふのも、このやうな楽しみとやり甲斐があったからでは無かつたかと思ひます。このやうな教育は、今の日本ではとても奨められるものではありませんが、かういふ生き方も、それが成功するしな

いに拘らず、1つや2つはぜひあつて欲しいものだ、と私は思つてゐます。